

公開研究会講演記録〈第 317 回 (2024. 11. 26)〉

第 317 回 産業経営研究所公開研究会（研究発表会）

「地方圏と都市圏における伝統的祭礼と

社会関係資本に関する調査研究」

研究代表者 日本大学経済学部教授

鷲見 英 司

研究分担者 日本大学経済学部専任講師

渡 邊 隼

研究分担者 東洋大学経済学部教授

川 瀬 晃 弘

鷲見（研究代表者） それでは時間になりましたので、第 317 回産業経営研究所公開研究会を始めさせていただきます。今回発表させていただく内容の「地方圏と都市圏における伝統的祭礼と社会関係資本に関する調査研究」は昨年度まで産経研から助成をいただきましたので、あらためてお礼させていただきます。

まず、先生方にお配りさせていただいている縦長の資料ですが、これは報告書の内容が中に書かれていて、1 枚めくっていただきますと、研究の目次、はしがき、まとめがございます。

3 ページ目に、この研究で学会報告等 4 回やらせていただきまして、アンケート調査のまとめ等もさせていただいております。『経済集志』に掲載いただいている成果等もありますので、併せてご確認いただければと思います。

早速ですが、ブルーの横長の資料で「地方圏と都市圏における伝統的祭礼と社会関係資本に関する調査研究」のパワーポイント資料もごらんいただければと思います。

私どもが研究を始めた背景というところからまず共有させていただきたいと思います。なぜ伝統的祭礼なのか、なぜ阿波おどりなのかというモチベーションは、私個人が阿波おどりのお仕事をさせていただいております。その中で、どうやって伝統的祭礼を次の世代につなげていくのかというような課題が地方圏にあることを知ることに

なったためです。

最近の日経新聞でも紹介されておりましたけれども、こういう伝統的な祭りを公共が支えるというようなところも出てきています。かつては人口増加や経済成長を背景に、阿波おどりに代表されるような伝統的な祭礼は盛んに行われてきました。歴史もありますし、阿波おどりの場合は主催者発表で言えば 100 万人以上の観光客があるとか、ねぶた祭りもそうですし、高知のよさこいなど、いろいろな祭礼がある中で規模を拡大してきました。

しかし近年では、担い手の減少が起きていたり、娯楽の多様化によって団体客を見込めなくなっているような現状もございます。さらに追い打ちをかけるように、コロナの感染拡大によって開催中止を余儀なくされたという背景もございます。ほんとにこれらは続けていかれるんだろうとか、そもそも祭り自体はどういう社会的な役割を担っているのか、そういうようなことが問われるようになってきましたので、学術的な研究もさらに広げていかなければならない、というところが問題意識でございます。

ただ、伝統的な祭礼とか活動を支える担い手といった人たちの活動の評価に対する情報はいまいち欠けておまして、そういうところで私どもが貢献できないか、というところが出発点です。

具体的に学術研究としては、論文の中にも説明

はあるんですけれども、極めて物質的な研究がメインでございまして、定量的な研究が、必ずしも十分な分析がなされてきていないということが研究を始めるに当たって分かりました。

たとえば経済学で言うところの言いますと、経済波及効果とかそういったものも、阿波おどりの場合は1990年ぐらいに地元のシンクタンクが1度やったぐらいで、なかなか信頼に足る分析もないですし、伝統的な祭礼が地域の活性化とか社会関係資本に与える影響のような研究も行われていなかったもので、今回、「徳島市阿波おどり」をベースに、徳島市役所の協力を得ながら、市民への阿波おどりに関する調査とか、その担い手への調査とか社会関係資本に関する調査をやらせていただいて、阿波おどりとかかわりが社会関係資本やQOLにどういう影響を与えるか、というようなことを分析しようとして研究を始めたということでございます。

今回、2つのアンケート調査を実施しております。2022年11月から12月に徳島市民5000人に対して住民基本台帳からランダムに採っていたいて、社会関係資本であるとか、阿波おどりとのかかわりであるとか、個人属性を聞く調査をやらせていただいています。その成果はすでに、集計結果をまとめて「経済集志」で発表させていただいております。

もう1つは、ちょっと時期がずれましたけれども、「連」というのが徳島の踊りのグループでございまして、連員の方たちを対象にした同じアンケート調査をさせていただいております。連に関しましては連の中のこととか課題についても詳しく聞いておりまして、市民調査と重複する部分と新たに連固有の調査もしているということでございます。今回この2つのアンケート調査をさせていただくことで、阿波おどりへのかかわりの実態であるとか、市民のソーシャルキャピタルと阿波おどりととの関係を分析したいということでございます。

具体的にどういう変数をソーシャルキャピタルとしていて、どんなことを聞いたのかというのがこちらのスライドのようになっております（資料P5）。ソーシャルキャピタルと言われているものは、内閣府の定義では「付き合い・交流」とか「信頼」「社会参加」とありまして、この3つを改

めてここでも聞いています。これらは従来、ソーシャル・キャピタルとしてアンケート調査でよく尋ねられている項目です。それに加えて「地域への愛着」ですとか、QOLを示す「生活満足度」とか「健康状態の満足度」を調査しております。

具体的には（資料P8～20）このようにかなりのたくさんの変数を聞いておりますので、これ1個1個は報告書の中でピックアップしたものを説明しておりますが、たとえば今日の私の報告では「信頼」にフォーカスして説明させていただきますけれども、RENと書いてあるのは連員調査、CITIZENと書いてあるのは市民調査で、それぞれどういうふうに違うのか、簡単に整理させていただいているものでございます。「一般信頼」、「地域の活動への参加度」、「ボランティア活動への参加度」とかそういったものを聞いているというものでございます。今日はアンケートデータを使って出てきた結果をご報告させていただきたいというところがイントロダクションになります。

これから3人のそれぞれ報告をさせていただいて、最後に私からまとめをさせていただくということで進めさせていただきます。

まずは、今回メンバーに加わっていただきました東洋大学の川瀬先生からアンケート全体のご報告をいただきまして、その後、渡邊先生と私という流れで説明させていただきたいと思います。

「阿波おどりと地域社会との関わりに関するアンケート調査分析」

川 瀬 晃 弘

ただいまご紹介にあずかりました東洋大学の川瀬と申します。

私のほうからは、いま鷺見先生がご紹介になられた「市民調査」と名前がついております市民を対象にしたアンケート調査のクロス集計の結果をお話しさせていただきたいと思います。

スライドの冒頭は鷺見先生が「目的」のところでお話しになられたことと重複しますので、3枚目のスライドからお話しさせていただこうと思いますが、日本語だと社会関係資本という名前がついておりますが、ソーシャル・キャピタルというのは経済学で言う「人的資本」と同じようなか

たちで考えられてきまして、人と人との関係性の強さ、つながりというものが経済活動の効率性にも寄与するというのがいろいろな研究で指摘されてきました。

その中で「ソーシャル・キャピタルへの投資」というのは、集団的な活動に参加することによって蓄積されていって、それを使っていくと増えていくけれども、使わないと減っていく、というようなことが経済学や社会学の文献で指摘をされております。

このソーシャル・キャピタルが伝統的な祭礼とどう関係するかというのは、先ほど稲葉先生の研究も指摘されておりましたけれども、いろんな事例研究であるとかそういうものは豊富にあるんですが、残念ながらそれは定量的に把握するということはいままでの研究の中ではあまりなされていない。ここには京都の三大祭りであったり岸和田のだんじり祭りとかそういう個別の事例を扱ってソーシャル・キャピタルがどうやって蓄積されているかというような事例研究はあるんですけども、実際にアンケート調査をやってそれを定量的に把握するということはあまりない。

今回われわれはちょうどコロナの時期と重なりましたので、コロナによって実際に阿波おどりが開催中止に追い込まれるということがあったわけですけども、そういった活動が中断してしまったことがソーシャル・キャピタルにどういう影響を与えているのかということについては、たとえばロックダウンのようなものを取り上げて扱った研究というのはあるんですけども、お祭りが中止になったことがどういう効果を持ったかということについては、われわれの知る限り、研究がない。今回、徳島市民を対象にしながら社会関係資本に関する調査をするということで、このデータセットを使いながら、われわれいろいろな研究をしたい。きょうお話するのは、その中でもクロス集計の部分だけをさせていただこうと思います。

今回の報告書の中では性別・年齢階級別とかいろんな切り口でクロス集計をまとめておりますが、本日は時間の関係もありますので概要をお話しさせていただくに止めたいと思います。

単純集計については「経済集志」のほうにまとめておりますので、お手元にあるかと思いますの

でござんいただければと思います。

まず調査を行うに当たっての背景をご説明したいと思います。

阿波おどりは徳島市で毎年8月12日から15日に開催されております。ここには2019年から2022年までの開催状況について記してあるんですが、2019年は台風によって開催期間が短縮されたんですが、ここまでは阿波おどりが開催されておりました。それが2020年、コロナのために戦後初めて開催中止に追い込まれるということがありました。その後、段階的に開催が進められるというかたちになったんですが、われわれのこの調査は2022年の11月から12月にかけて実施をしました。ですので2023年以後は書いてないんですが、2022のところではわれわれはこの後の段階で調査を実施しております。

どういう聞き方をしているかといいますと、まず「この年の状況について教えてください」。もう1つは「コロナの前、2019年のことを思い出しながら回答してください」ということで回想的に回答してもらうようなかたちでアンケート調査を実施いたしました。

15歳から74歳までの徳島市民を対象にしております。サンプリングは住民基本台帳から、年齢階級と23地区の人口構成を反映しながら5000のサンプルを抽出するというかたちで5000配布しました。実際に回収できたのは1100でしたので、回収率22%になりますが、全て郵送で行いました。

実際の調査票は「経済集志」の一番最後のアペンディクスに細かいものが載っておりますので、ぜひそちらをごらんいただければと思うんですが、このスライドでは実際にどういう設問を設けたかということだけを並べております。

尋ねているのは徳島市民に「阿波おどりとどういう関わり方をしていますか」ということを最初に聞いております。次に、いま関わりはないんだけど、過去関わりかあるという方について、「どういう関わり方をしていましたか」ということを尋ねています。なので、〔1〕と〔2〕では阿波おどりと関わり方について質問をしております。

3つ目のパートはいわゆるソーシャル・キャピタルに関連するところで、先ほど鷺見先生がお示

しになられたものを尋ねております。最後に回答者の属性、性別、年齢、収入ですとか、そういったものを尋ねるというやり方をとっております。

まずサンプルの特徴ですが、基本的には年齢階級と地区別に配布しております。「実績」と書いてあるところが実際の徳島市の分布になるんですけれども、それと比べてちょっと厚みがあるところと若干薄くなっているところがございますが、おおむね年齢階級と地区の分布に応じて回収ができているとわれわれは認識しております。

続きまして阿波おどりと関わり方ですが、まずこの「関わり」というのはどのように尋ねているかといいますと、「観覧以外」にどういう関わり方をしているかということを探しております。「観覧だけ」、「現在関わりがある」、「過去に関わりがあった」、いままで全く関わりがない」という4つの選択肢で一番最初に尋ねて、そこから分岐するというやり方でアンケートをとっております。

この回答から分かることは、まず「現時点で阿波おどりと関わりがある」と答えた人が全体の5.1%、約5%でした。「過去関わりがあった」と答えた人は23%おりましたので、両者を合わせると30%弱ぐらいは、現在ないし過去に関わりがないしはあったということになります。

「観覧だけ」という方は約半数いらっしゃるということです。観覧も含めたかたちで「関わり」というものをとらえたときには8割ぐらいの方が阿波おどりと何らかの関わりを持っていると言えます。逆に言いますと、残りの2割の方は阿波おどりと全く関わりがない、観にも行かないという方がいらっしゃるということです。

続きまして、「どういう関わり方をしましたか」ということで、実際に「関わりがある」と答えた方は977人のうち50人なんですけど、その50人に対して「どういう関わり方をしていますか」と尋ねております。これを見ますと多いのは「連員として関わっている」という方。これは複数回答ですので、回答した人の中で言うと4割程度、実際に回答があったという中で言うと半分ぐらいが「連員として関わっている」。その次に多いのが「職場の仕事として関わっている」という方が多くなっています。逆に言いますと、ボランティア的な関わりをしている方は非常に少ない、です。踊り手として参加をするか仕事の関連として

関わっているかという方が圧倒的に多いことが分かりました。これは現在も過去も同じように読み取ることができます。複数回答になっているんですが、複数答えている方はそれほど多くなくて、どれか1つの関わりを持っている方が圧倒的に多いことも分かりました。

続きましてコロナ禍でどういう制約がありましたかということ、関わりがあると答えた中で「連員」と回答した方に対して、「どういう変化があったか」ということを次に尋ねております。この中で、まず「練習場所が確保できなかった」、「踊りを披露する機会が減少した」と書かれた方が圧倒的に多かった。次に「もう連をやめてしまう」という人がいたことも確認されております。

実際にコロナ禍でわれわれの活動も大きく制限されたので、このようなかたちで活動が大きく制約されたということは想像にたやすいわけですが、実際にこの調査からもそういうことが観察できました。

ここまでは、実際に阿波おどりとどのような関わりを持っているか、それがコロナ禍においてどういうふうに変ったかということを探しております。

続きましてソーシャル・キャピタルの部分なんですが、まず最初に、「家族あるいは友人とどれぐらいの頻度で会っていたか」ということを、コロナ前とコロナ後、両方について回答してもらっています。これを見ていただくと、まず家族との交流頻度は比較的高くなっている。「友人と職場以外で会う」という方も月に数回から半年に数回ぐらいという方が結構多かったわけです。これもコロナによって非常に大きく制約されているということが分かります。

続きまして「近所の人との付き合い方あるいは学校や職場の人との付き合い方」を探しております。これもコロナによって結構制約されてきていることが分かります。

この表には載せていないんですけど、報告書の中で年齢階層別に見たときには、近所付き合いというのは年齢階層が高い方のほうが密なんですけれども、そういう方ほどコロナによって付き合いが制約されてしまっていて、いわゆるソーシャル・キャピタルが棄損している可能性が高い、逆に学校や職場での人とのつながりは若い人ほど密

なんですけれども、こういう方は直接会わなくても何らかのかたちで付き合いを継続しているような傾向が見受けられることも分かりました。

続きまして「信頼」は、地域内の顔見知りの人に対する信頼、地域内ですが全然知らない方への信頼、そして地域外の全く知らない方への信頼というかたちで、3つのタイプの信頼を尋ねています。

これを見ていただくと、まず「地域内の知人を信頼しますか」という設問に対してはポジティブな傾向が高いんですけれども、「知らない人に対して信頼できるか」というのは、距離があるほど信頼が低くなっていくことが分かります。ただ、非常に興味深かったのは、コロナ禍で多くの活動が制約されたにもかかわらず、「信頼」という項目についてはコロナ禍でもあまり低下が確認されなかったというのが、ほかのソーシャル・キャピタルとは大きく違うポイントでした。

一方、「地域活動への参加」というのは、やはり活動が大きく制約されたということをわれわれも認識しております。残念ながら徳島市はもともこの活動にはそれほど積極的ではなかった傾向が見受けられるんですが、それもコロナ禍によって大きく制約されてしまったということが明らかにになりました。

「地域への愛着」は比較的愛着を示す方が多くて、「愛着を感じている方」が4割、「少しは愛着を感じている方」が34%ほどで、70%ぐらいの方が地域に愛着がある。実際に居住年数を見ても比較的長いことが分かります。

QOLについては、「生活全般への満足度」はコロナによって大きく低下したことが分かります。「健康状態への満足度」も、コロナによって外に出られないとか運動できないということによって主観的な満足度がちょっと下がっている、というふうにとらえることができます。

雑駁ではありますが、われわれはまずこの市民調査を通じて阿波おどりへの関わり方とソーシャル・キャピタルとの関係を体系的に調査をするということをいたしました。ここにはソーシャル・キャピタルに関係するところだけまとめておりますが、「付き合いとか交流」を示すソーシャル・キャピタルはコロナ禍で大きく低下しています。一方、「信頼」に関しては、いわゆる特定信頼と呼ぶ

んですけれども、「地域内の知人を信頼する」というのはポジティブなんですけど、「知らない人への信頼（一般信頼）」はそれほど高くない。ただ、コロナ禍によってそれが低下したというのはあまり観察されない。それから「社会活動」はあまり積極的でなかったわけなんですけれども、コロナ禍によってさらに低下してしまいました。そして「市民の多くの人が居住地域に愛着を持っている」ということと「QOLがコロナ禍によって悪化してしまった」ということが観察できたということです。

実際にわれわれ、このデータセットを使いながら、もう少し計量的な分析を進めている、というのが現在の状況でございます。

以上、私からのご報告とさせていただければと思います。ありがとうございます。

鷺見 続きまして渡邊先生からご報告いただきます。よろしくお願いします。

「伝統的祭礼に対する市民意識とソーシャル・キャピタル——徳島阿波おどりの事例研究」

渡 邊 隼

渡邊 それでは始めさせていただきます。日本大学経済学部の渡邊と申します。よろしくお願いします。

私の報告タイトルは「伝統的祭礼に関する市民意識とソーシャル・キャピタル——徳島阿波おどりの事例研究」ということで始めてまいります。

市民調査と連員調査という2つの調査を行ったというのは鷺見先生、川瀬先生からご報告いただきましたが、そのうち市民調査の自由記述欄（調査票の問35）の回答内容の分析が私のこの研究の概要です。調査票は「経済集志」の巻末に載せてあります。

先ほど鷺見先生、川瀬先生から、定量的な調査・分析がこの研究の主眼であるということをご説明いただきましたが、私の研究は自由記述欄ですから、質問項目があるわけではなくて、自由に回答する、書かなくてもよい。その内容を分析して、それをコーディングをして、それをモデル化した、そうした内容を行ないました。

実際に市民調査の自由記述欄の回答内容をまず「回答あり」「なし」で分けると、無回答が全体の60%程度で、約3分の1ぐらい回答があった。「回答あり」の中でも一言だけ「特になし」とか「なし」とか実質「無回答」に等しいものは除外して、何かしらの文字、文章表現が書かれているものだけを対象として、それが416票で、割合では37%ぐらい。これらを全てコーディングして、質的な分析ソフトをツールとして使いました。

どういう基準でコーディングを行なったかというのも非常にシンプルで、阿波踊りに対して回答した方が肯定的・積極的・好意的なポジティブな評価なのか、否定的・消極的・非好意的なネガティブな評価なのか。ポジティブとネガティブの二分法で分けても、その内実はいろいろですので、どういうふうにポジティブに評価しているのか、どういうふうにネガティブに批判しているのか、それを詳しく見ていくということです。

(資料P9) コーディングをして共起モデルをつくった結果をポジティブ／ネガティブで図にすると、このようになります。モノクロで印刷してしまったので出力結果の文字がつぶれてしまっているかもしれないんですが、このポジティブ／ネガティブをどういうふうに評価しているか、この後詳しく見ていきます。

(資料P11) まずポジティブなものだけに絞って、ポジティブな評価の生起モデルが図表3です。これを要点だけまとめますと、阿波踊りに対するポジティブな市民の評価として、「徳島の文化とか伝統」であるということを肯定的・ポジティブに評価する回答が非常に多かった。これと関連して、これからの発展への期待、今後発展していきますように——「阿波おどりのこれからの存続・継続、将来的な維持」みたいなことを含む——これが多かった。あとは「阿波おどりと地域社会・地域経済を肯定的にとらえる」ようなポジティブな評価。それに関連して、徳島に限らず全体的によく言われることですが、「まちづくり・観光まちづくり」みたいな評価が非常に多かった。

あとは単純に「楽しい」とか「毎年楽しみにしています」みたいな回答であるとか、伝統とか文化にも関連しますが、「徳島の誇り」であるとか、子どもと阿波おどりを関連づけてポジティブに評

価する。たとえば小学校で阿波おどりの練習をしている、それを肯定的に評価するとか、いわば子どものレトリックという感じで評価する声も多かった。

数としてはポジティブ／ネガティブは大体同数ぐらいで、どちらが多い・少ないというのはあまりなくて、ネガティブな評価も大きく分けて4つ、実質3つです。

まず「トラブル・不祥事」「特定団体・個人の利権」、これは阿波おどりの運営サイドへの批判です。特に近年、コロナ禍でもそうでしたし、コロナ禍の少し前ぐらいから、徳島市の政治・行政とも関わって地元メディアなどでもいろいろネガティブなニュースが流れたりして、阿波おどりの運営体制に対する不信の声がある。トラブルや不祥事があったり、阿波おどりが特定の団体・個人の利権になっているのではないかと、そういうネガティブな評価・声が多かった。

もう1つは「赤字」とか「税金」、これは主に行政に対して向けられている批判的な声ですが、赤字を垂れ流しているとか、税金の無駄遣いになっているのではないかと、開催の費用であるとか阿波おどり運営の経済的な側面に対する市民のネガティブな意識・評価がある。

この2つは比較的予想の範囲内ですが、あと多かったものは「開催期間が長い」。先ほど川瀬先生からご説明していただいたように現状ではお盆休みのころの4日程度で行われているんですが、イベントなども含めると1年を通してやっているみたいな側面もある。基本的にはお盆休みにかけてコアのメインのお祭りが行われるわけですが、これが長い。2日とか3日ぐらいでいいんじゃないかみたいな回答が結構ある。反対に、現状では開催期間が短いからもっと長くしたほうがいいというのはゼロでした。

これが大きく分けて3つで、それ以外にも、そもそも阿波おどりに「関心がない」、「興味がない」、「無関心」という回答も幾つか見られて、この3つについてもどちらかというとネガティブな評価に入れています。

以上、ポジティブ／ネガティブをそれぞれ見て、分析を進める中で特徴的に見られたのは、私が調べ始めた当初は予想していなかったんですが、「かつて過去はポジティブに評価していた阿

波おどり。しかし現在は……」, そういう言い返し, 表現がそれなりの数見られました。「昔の阿波おどりはよかったんだけど, いまはだめだよ」みたいなネガティブな評価に移行しているのが13票あって, その反対に「昔はだめだったけど, いまの阿波おどりは最高です」みたいな, ネガティブからポジティブというのは0票でした。

もう少し詳しく述べると, 言い返し, 細かい表現には差がありますが, 「かつての阿波おどりは市民中心であった。庶民の祭りで, みんな参加していた。現在はそうではなくて, ビジネスとか商業色が強くなってきた。その点はどうかと思う」というのが共通の見解でした。

属性は関係なく回答だけを載せているんですが, 「昔は年に1回しか阿波おどりはなかったので楽しみにしていた」とか, 「小・中学生のころは運動会で必ず阿波おどりの練習があって, みなで踊っていたので, ある程度の年齢の人は誰でも踊れます」とか, 「いまとなればこれが徳島に住んでいる者の誇りかもしれません」とか, いまは「ビジネス的でエネルギー感なのは分かりますが, 本来の意味をもう一度考えてほしい」という年配の方のご回答もありました。これなんかが象徴的にしているように「庶民の祭りという原点に立ち返り, 楽しい時間にしてほしい」「参加型の阿波おどりに戻してほしい」という言い返しで, これもネガティブな評価ととらえています。

次に阿波おどりとソーシャル・キャピタルの関連ですが, 川瀬先生から詳しくご説明していただいたように, 基本的にはこの調査の主眼は定量的なアプローチで, ソーシャル・キャピタルを測る質問項目を数量的に表すということですが, 実際に自由記述欄ではどういう回答が見られるかというと, もちろんソーシャル・キャピタルとか社会関係資本といった専門用語で回答されている方はいない。質問票でも「ソーシャル・キャピタルあると思いますか」とか聞いているわけではないので, ある意味当然です。

最近ではソーシャル・キャピタルに準ずるような日本語の表現として「つながり」とか「きずな(絆)」がよく使われますので, その出現頻度を調べたところ, 「きずな」は0票, 「つながり」は9票あった。

その中でも阿波おどりと「つながり」は2票

で, 1票はポジティブ, もう1票がネガティブでした。ポジティブな評価としては, 「(阿波おどりは) 地域, 人とのつながりを維持するうえで非常に大切なものと考えている」。一方, ネガティブな評価は辛辣で「もはや阿波おどりは地域社会のつながりと全く関係がない」「阿波おどりはショー化している」「ビジネスでショーのようにして, それが地域社会の『文化』のように強調されている」「阿波おどりという非日常の『イベント』が現在では地域社会とはかけ離れた, 地域社会のつながりと何ら関係ないように思う」と言っています。

ネガティブな評価のコードは, 阿波おどりの運営をめぐる「トラブル・不祥事」と, 税金の無駄遣いなど「特定団体・個人の利権」が多い。一方で, 地域社会のつながりに関連するネガティブな評価はさっき言ったもののみで, 結構例外的である。

もう1つ特徴的だと思ったのが, 4票で全体から見れば少ないんですが, 意外と多いなと思ったのが「阿波おどりのショー(化)」で, これもネガティブな評価です。「かつては市民・庶民のお祭りだったのに, いまではショー化して」とか, 4票全てが「ショー化」という表現を用いていて, ショービジネスになっているという悪い意味で言っている。これも想像していなかったので興味深いなと思いました。

市民調査の自由記述欄の中には, 「私が住んでいる〇〇地区は, とても住みやすい, 子育てしやすい環境です。人と人とのつながり, 助け合いもあり, 居心地がよいです。私は△△出身ですが, 徳島が大好きです」と, 子育て世代の女性のかかなり肯定的な意見もあって, 批判的なものばかりではないし, 高齢者の回答ばかりではないということも分かります。伏せ字にしてあるところは〇〇は徳島市の地区の名前で, △△は高知です。

終わりに本研究の知見ですが, 阿波おどりへの市民の評価はポジティブ/ネガティブの票数は同程度。ポジティブな評価とネガティブな評価の実際は先ほど詳しく見たので時間の関係もあって割愛します。ポジティブな評価からネガティブな評価への変化も先ほど見た通りで, 「かつては市民・庶民の祭りだった, その本来のあり方に戻してほしい」という意見もありました。

阿波おどりとソーシャル・キャピタルの関連で

は、「つながり」などの言葉と関連づけた回答はごく少数だった。その中にはポジティブなものもあれば、ネガティブなものもあった。

以上がこの研究のひとつの知見で、今後の展望と課題ですが、本研究ではポジティブ／ネガティブな評価だけに絞ってしまったんですが、実際にはそれ以外にも、たとえば「観光」とか「まちづくり」に関するコードにもポジティブ／ネガティブの評価がある。ネガティブな評価の場合は、「阿波おどりも含めて、徳島の現状はここはいけない。だから私はこうしたほうがいいと思う」という提案型のものもあると思う。提案型の中には、市役所の中の人々が回答しているのではないかなと思えるような具体的な複雑なプランを提案したうえでのネガティブな評価というものもある。それは単に文句を垂れるのとは別の、質的にかなり異なるものなので、今回はうまくつくれなかったけれども、それをもうちょっとうまく活かせないかというのが1つの課題だと思う。

2点目は、連員という阿波おどりに強くコミットしている人たちにも調査しているので、自由記述欄にはポジティブな評価にせよ、ネガティブな評価にせよ、かなりの熱量と分量で書かれている。今回は時間的制約からそこまで及ばなかったけれども、それをもうちょっと市民調査の分析結果との比較検討も必要だと思います。

もう1つは方法論的な話ですが、質的な分析と、この後鷺見先生がお話くださるような量的な分析をうまく組み合わせ、質的調査・質的分析、量的調査・量的分析との混合的手法でソーシャル・キャピタルの調査法としてうまく発表させられないかなと思案しておりますし、実際そういう研究も行われています。

以上です。

鷺見 ありがとうございます。

「阿波おどりの連員とソーシャル・キャピタル」

鷺見 英司

「阿波おどりの連員とソーシャル・キャピタル」ということでご説明をさせていただきたいと思います。連の方たちへの調査と市民調査と2つ併せ

た分析で、阿波おどりに日常的に関わっている方たちと市民の方たちでソーシャル・キャピタルがどれくらい違うのかということを分析しようとしております。

気をつけなければいけないところは、連で踊っている方たちはそもそもソーシャル・キャピタルが高い人たちかもしれないので、もともと持っているソーシャル・キャピタルの違いというのをどこかで調整して分析しなきゃいけないんじゃないかという点です。最近経済学の中でも意識されているセレクションバイアスを考慮した実証分析を幾つか試しているところで、その手法としては傾向スコアを使っているということがポイントになります。

今回のデータは、市民調査はランダムサンプルとしてとっているんですけど、連員（有名連）調査のほうは徳島市からお願いをして各連員に直接配っていただいたものです。連の中には徳島市民でない方もいるので、その中から徳島市民の方だけを抽出して分析し、市民同士の比較をしています。

ある個人が連員であるか連員でないかということの確率を計算するロジット分析から傾向スコアを算出します。これは個人が連員グループと処置群に割りつけられる確率です。割り付けの結果の精度は統計的に問題ないという結果を得ています。

傾向スコアを使ってセレクションバイアスを調整するやり方としては幾つかあるのですが、1つは単純に回帰モデルの中に傾向スコアを入れて、 $D_i = 1$ は連員の場合、一般市民であれば $D_i = 0$ というかたちのダミーを入れてソーシャル・キャピタルに対して推計する。

変数の重みづけ、スコアの重みづけをすることによって、両者のバランスをとっていくやり方もあります。その他、この傾向スコアでマッチングさせて、処置群と対象群とうまくグルーピング化するというやり方もあります。いろんなやり方があるんですけども、今回は2つやってみた結果、ほとんど変わらなかったの、こちらだけ紹介させていただくということです。

変数としては先ほどから出ている全部の変数をそのまま使って分析をしています。それがこの結果です。先ほど川瀬先生からもお話がありました

けど、(資料 P10) 2019 年当時を思い出して回答してくださいというものと現在どうですかというのの 2 つを推定しています。

*が統計的に有意だったというところで、年によって若干統計的に有意だったりなかったりするところがありますけれども、「地域への愛着」は連員のほうが統計的に有意に高い愛着を持っています。「健康状態への満足度」は連員のほうがマイナスに出ています。「家族と出かける頻度」が連員のほうが 22 年は低くなっていたりしているのですが、「付き合い・交流」でちょっとプラス、「信頼」が安定的にいずれもプラスに出ています。

これだけだと分析の意味がよく分からないので、こんな整理をしてみました。(資料 P11) この表では 19 年と 22 年のことを聞いていて、連員のほうが統計的に有意性が高いソーシャル・キャピタルを持っているのは左側に載せていて、市民のほうが有意に高いソーシャル・キャピタルを持っているのは真ん中、差がないのは右側ということで、大体同じような傾向は示しているんですけども、「友だちと会う頻度」が、コロナ禍前は連員のほうが高かったんですが、コロナ禍になってあまり市民と差がなくなってきたとか、「健康満足度」はもともと差がなかったんですけども、コロナ禍で連員の方のほうが満足度が下がっていて、これは隔れなくなったからではないかという気がしますけど、「家族と出かける頻度」も、もともと差がなかったのですけれども、家族と一緒に連に入っている方もいらっしゃるの、コロナ禍で連の活動が制約されてということもあるのではないかと思います。「友だちと会う頻度」も変わらなくなったりとかそういう変化もありましたけれども、基本的に安定していて、特に「信頼」というところだと統計的に有意な関係が出てきています。それがセレクションバイアスを取り除いた分析結果です。

(資料 P12) この手の分析では被説明変数に当たる部分、つまり左辺に当たる部分が選択肢になっているものですから、1, 2, 3, 4, 5 という数字が一応割り当てられているんですけども、これには全く意味がないので限界効果を推定して、たとえば連員ではない一般市民がもし連員になったら「全く信頼できない」を選択する確率が何ポイント変化するかというような推定をする

のがこういうデータにおける統計分析のやり方で、まさに限界効果を計算しています。

ここでは「信頼」だけで見ていますけれども、もし一般市民が連員になった場合の平均値を取ってみるとどういう変化が起こるかという、「周りの人を全く信頼できない」と答える確率が「地域内の知っている人」だったらちょっと減って、「信頼できる」が高まります。

「地域内の全く知らない人」、同じ町内の知らない人に対しては「全く信頼できない」の選択確率が約 8 ポイントぐらい下がる代わりに、「ある程度信頼できる」が結構上がってくる。

「地域外の全く知らない、どこに住んでいるか分からない他人」に対して「全く信頼できない」を選ぶ確率は 10 ポイント以上低下するということが、もし個人が連員じゃない市民の状態から連員になることによって著しく変化するのは「全く人を信頼できない」という選択確率が大きく低下するということが、今回推定結果として見えてきたということです。

つまり、連員のほうが有意に統計的に高いと出てきていますけど、全く知らない他人については「信頼できる」とか「とても信頼できる」みたいなところが増えるわけではなくて、「全く信頼できない」が減るいう変化が起きているということが確認できました。ただし、「地域内の知人」に関しては「かなり信頼できる」の選択確率が大きくなるという変化が確認できました。

それを視覚的に表したのが資料 P13 以降で、「地域内の知人への信頼」に関しては、ネガティブな回答がなくなってポジティブな回答に変わっています。「地域内の他人への信頼」に関しては、ネガティブな回答から中くらいの回答に変わっています。「全く地域外の全く知らない人への信頼」に関しては最もネガティブな回答が非常に大きく改善して、少しネガティブとか中くらいの評価が大きくなるというような変化になります。

連の活動と「信頼」ということで関係づけてみると、劇的に大きく信頼が高まっていくわけではないですけども、人に対する著しい不信感みたいなものが改善されていく。そういう変化があるのではないか、そんなようなことを今回推定してみても分かったということです。

その他の資料 P17 で、「地域への愛着」も見て

みますと、「地域への愛着」は、連員はすごい高いです。「健康満足度」はコロナ禍で連の方のほうが悪くなっていたり資料 P18 では「外出する頻度」も低くなっていますけれども、「近所付き合い」とか「趣味への参加度」は連員のほうがポジティブに確率が高まっている、そういう結果がでています。

私が今回注目したのは「信頼」ですけれども、なぜ「信頼」というものが一般の市民よりも有名連で活動されている方が高くなっていくのか考察してみると、連の活動というのがボンディング型・内向きのグループの活動というのもありますけれども、かなりブリッジング型でもあって、有名連の方たちというのは踊っている場所が徳島県内だけじゃなくて全国、世界に行って踊っている方たちで、そういうことを考えると、一般市民の方たちよりも外を見る機会とか他人に会う機会が高まっているのかなというところがあって、地域内外の他人への不信が弱まるというのはそういう経験が一般市民との違いを生んでいるのかなと思います。また、連というのはボンディング型・結束型の組織ですから、地域内の人とか近所付き合いみたいなところでは非常に上手にやっていけるのかなというところは感じています。

先ほど申し上げましたが、確かに有名連の方たちの「信頼」は一般の市民よりもよいんですけれども、一番大きな変化は「全く人を信用できない」というところが劇的に違います。そういうところが違いとして出てきているということです。ポジティブでものすごい他人を信頼しているというわけじゃないんですけど、「ほんとに他人って信頼できないね」という人たちが連の活動を通じてあまりいなくなるということです。そこはいい成果なんじゃないかと思います。

今後はマッチングという手法を使いながら、対象群と処置群をうまくグループ化して、単純に連に入っているか入っていないかということで両者を比較できないかと分析も進めているところでです。

それが私個人の研究で、市民調査と連員調査とうまく合わせて統計分析をさせてもらっているということです。最後のまとめまでご説明してご質問を受けたいと思います。

先ほど渡邊先生からもご指摘があったのですけ

れども、確かに定量分析だけやっているわけではなくて、アンケートの記述の調査もやっていたいただいておりまして、視覚化する、ちゃんと分かりやすく説明することが大事だと思っています。そういったことも今回新たに研究できたことかなと思っています。

今回はほんとにいろんなことをやっているの、私の最初の資料の最後ですけれども、ほんとに主なまとめだけさせていただきますと、先ほど阿波おどりと関わりのある市民が5%とありましたが、実はもっといるんじゃないかなと思ってたんです。対象者が18万人ですから5%というと9000人ぐらいいるというのは結構妥当な数字かもしれない。先ほどからもありますけど、実は地域で阿波おどりをやるというのがもうほとんどないみたいで、地域に根ざした祭りには実はなくて、連という横断的な組織がうまく作用する、活動することで徳島市の阿波おどりが成立しているというところがありましたので、実は徳島市民じゃない方たちもかなり入ってきていて、地域を超えた横のつながりが主流になってきているので、徳島市民の中で運営とかボランティアでかわわってくるという人は実際どれぐらいになっているのかなというところが今回新たに分かったということです。

それから、連の調査をすることでどういうことが分かったかというと、「コロナ禍でもとの活動量が半分以下になった」と回答した方が6割もいたということで、かなり活動が制限されていたという実態も今回分かりました。

課題としては「連員の確保」と全体の87%の人が回答しています。ここはすごい大きな課題で、同じように「若い人たちにつなげていく」ということも76%の人が回答していて、「伝統芸能の継承」みたいなことは36%とわりと高かったんですけど、これらに伝統的な祭りの継続性に関する課題があるということが分かりました。

最後ですけれども、ソーシャル・キャピタルの関係性ということのをいまわれわれ一生懸命調べてますけれども、私が説明したところで言うならば他人を全く信頼しないという人の割合がすごい下がりますが、他人を信頼しないというのはどういうことかということ、そのへんに携帯電話を置いておけないわけです。そういう社会って非常に住み

にくいし、経済活動もやりにくいわけです。信頼がある社会というのは、ない社会に比べると、経済活動とか公共政策ということに関しては非常に重要な意味があるのではないかということです。ですから阿波おどりというのは人とのコミュニケーションを活性化することによって、人々の信頼をよい方向に向かわせてるんじゃないかというところが見えてきたきかなと思います。あとは川瀬先生との研究の中で、ほんとに広範にいろんな分析をしていただいているので、そこから新たな知見を追加していきたいなと思っているということです。

最後、課題ですけれども、いろいろあります。大きなものでは、今回私ども、都市というところもターゲットにしていたはずなんですけれども、都市の部分は全くできませんでしたので、ここは反省しているところです。「他の祭礼」も意識していたんですけれども、それもできませんでした。せっかく連の調査をすることができましたので、もうちょっと継続的にいろんなことをやっていかなきゃいけないなと思いますところでは。

長くなってしまいましたけれども、私どもの報告をこれで終わらせていただきたいと思います。

ありがとうございました。

(以上)